

特別支援学校における 道徳教育のカリキュラム・マネジメントの実態及び実践

学籍番号 219503
氏名 作田麻由子
主指導教員 西山 健
副指導教員 正井隆晶

1. 本研究の背景と目的

令和元年度より小学校、昨年度より中学校において「特別の教科 道徳」が全面実施された。この動きに伴い、学校現場では道徳科に関する研究・実践が進められ、全教科において新しい教育が展開されているところである。文部科学省（2018）は、先行する特別教科化など、道徳教育の充実や体験活動の重視、体育・健康に関する指導の充実により、豊かな心や健やかな体を育成することを基本的なねらいとして改善を行った。道徳科の授業の大幅改善は他教科の授業改善に関係しており、そこに先行実施の大きな意義がある。「特別の教科 道徳」における重要な独自項目として、特別支援学校学習指導要領各教科等には記載されているものの、道徳科の目標、内容及び指導計画の作成と内容の取扱いという観点からみると、特別支援学校において道徳科が教科化されていない学部や曖昧な実施にとどまっている場合も少なくない。特に知的障害特別支援学校においては児童生徒の特性上、想像力の点に困難さが認められる場合が多く、教材の選定に苦慮している教員も多くいるのが現状である。以上のことから、本研究では、特別支援学校における道徳教育の現状と課題について、現職教員を対象に面接調査を行い、主としてカリキュラム・マネジメントの観点から検討することを目的とした。

2. 研究の方法

大阪府立の特別支援学校（小学部・中学部・高等部）において、道徳科を担当している教員3名（各学部1名）を対象として、半構造化面接を実施した。所要時間は30～40分であった。面接における聴取内容は、面接対象者に承諾を得た上でレコーダにて録音し、逐語録を作成して分析資料とした。

3. 結果

上記の面接対象者に以下の質問（11項目）「道徳について年間指導計画はありますか。」「一年間若しくは一学期の授業時数は何時間ですか。」「道徳授業の実施時期は決めていますか。」「一年を通じてのテーマ（指導内容）はありますか。その内容は。」「道徳の内容の選定の仕方はどのようにしていますか。」「道徳の担当者は決まっていますか。どういう人が担当して

いますか。」「PDCAサイクルに基づいて評価をしていますか。している場合は具体的に、していない場合どのように評価していますか。」「指導形態（クラス分け）はどのようになっていますか。」「指導上の配慮や工夫はありますか」「クラス間での教材や内容の共有はされていますか。」「次の学年・次の学部等に道徳の内容は共有していますか。」に加えて追質問をした結果を学部ごとにまとめた。

4. 考察

面接調査の結果、知的障害特別支援学校の場合、他の障害種と比較しても道徳教育を実践することの難しさが顕著であることが明らかとなった。中学部教員の回答にもあったように、同じ特別支援学校でも肢体不自由あるいは聴覚障害と違って、知的障害のある子どもの場合は、相手の気持ちを理解するのが難しいことが多いので、道徳教育の実践に困難さが伴う。これは知的障害特別支援学校の特性とも言える。具体的には、他の教科と比較しても教材の選定や指導上の配慮が難しい上に、実践事例の蓄積がまだ十分になされていないのが現状である。

筆者は今回の調査結果を踏まえて、対象校の小学部にて実際に道徳の授業を行った。そのなかで、他者がどのような気持ちなのかを「うれしい」「かなしい」「こまった」等のイラスト付きカードを選択して確認する場面を設定したが、なかなか選択できなかつたり、異なる気持ちのカードを選択したり、直前の児童が選んだカードを模倣して選択したり、と児童によって理解度にばらつきが見られた。ただ、今回の授業実践のみで、他者の気持ちに対する児童の理解度を評価することはできない。評価とは、児童生徒がいかに成長したかを個人内評価として記述していくべきものであり、学習活動において一面的な視点から多角的な視点へと発展しているか、道徳的価値の理解を自分自身や他者とのかかわりの中で深めることができているか等の点を重視するべきであると考えられる。その意味においても、道徳の授業が単発で実施されるのではなく、ある程度の系統性をもって実施されることが望ましいと言える。

また今回の調査から、特別支援学校における道徳教育の指導形態や指導内容・方法について、小学部・中学部・高等部、それぞれに所属する児童生徒の年齢段階や発達段階による違いはもちろん考慮されているが、それぞれの学部や担当する教員の道徳教育に対する考え方や取り組む姿勢が大きく影響していることが分かった。学部間・学年間で情報の共有や連携が十分になされていないことからわかるように、知的障害特別支援学校においては、上述した実施の困難さも相俟って、まだ道徳教育が体系的な取り組みになっていないことが示唆される。この点において、カリキュラム・マネジメントの考え方は重要な意味をもってくるであろう。しかし、繰り返しになるが、「特別の教科 道徳」のカリキュラム・マネジメントについては、まだ緒に就いたところであり、今後の知的障害特別支援学校における大きな課題になるであろう。カリキュラム・マネジメントは、管理職、教務担当者、教科担当者などが個別に行うものではなく、学部全体あるいは学校全体で取り組むべき課題である。この点で、小学部・中学部・高等部の12年間という展望をもって計画ができる特別支援学校には強みがあると言える。

本研究における面接調査はある特定の知的障害特別支援学校（小学部・中学部・高等部）を対象としたため、その結果はかなり限定的なものであり、日本における知的障害特別支援学校の現状をそのまま反映しているとは言えない。しかし、特別支援学校における道徳科の現状や実践を取り上げた研究が希少であるなか一定の意義はあると考える。今後はより範囲を拡大して、特別支援学校における道徳教育の現状およびカリキュラム・マネジメントの実態を把握する研究ならびに道徳科の授業実践を進めていく必要があると考える。